

きょうだい関係と攻撃性の関連性について

今倉 茜

(川畑ゼミ)

人は職場や学校などの場面で、様々な人間関係を築きながら日々の生活を送っているが、人が誕生して初めて形成する人間関係は親子関係であり、次にきょうだい関係、きょうだいがいない人の場合は友人関係を形成する。成長過程における基本的な人間関係として考えられるのはこの3つであり、岡崎・杉井(2004)によると、親子関係は保護と教育に基づいた「タテ」の関係、友人関係は対等な立場でのやりとりと相互に選択性のある「ヨコ」の関係とされている。一方で、きょうだい関係について、依田(1990)はその両方の側面を持つ関係であると指摘しており、こうした異質な2つの関係を持ち合わせたきょうだい関係を「ナナメ」の関係と呼んでいる。そしてそれは、親子関係から友人関係への移行の仲立ちをする役割を持つと考えている。家庭内で多種の人間関係を経験することは、人間関係に大きく影響すると言える(長濱・村田・守谷, 2011)。

また、早川・依田(1983)は、「親子関係と友人関係のあいだに両方の人間関係の性質をあわせもったきょうだい関係がはいると、親子関係から友人関係への移行もスムーズにおこなわれる」と述べており、きょうだいを持つ人は、きょうだいを持たない所謂「一人っ子」に比べて、社会への適応に有利に作用すると予想されている。高橋(2009)の調査でも、きょうだいを持つ人の方が、一人っ子に比べて、社会的スキルの獲得において有利であることを明らかにした。これは、きょうだい喧嘩などの、きょうだいを持つ人ならではの友人関係を形成する基礎経験によって、実際の友人関係においてもスムーズに友好的な関係を築くことが出来ることを示すのではないかと推測される。

問 題

きょうだいがいることの性格形成への影響 きょうだい関係が性格形成に影響を及ぼす要因として、2つの要因が挙げられる。

第1は、子どもの出生順位による育成環境の相違である。同じ親に育てられ、同じ家庭環境で育ったとしても、きょうだいの出生順位が異なるだけで、それぞれ特徴的な人格や行動を形成することが多くの先行研究で明らかになっており、一般的にもそれが信じられている。長子は親にとって初めて生まれた子どもであり、子育ても未経験であるために、試行錯誤をしながら世話をする。だが、その次に下の子が生まれた場合、親は赤ちゃんだった頃の長子の世話をしたという経験があるために、長子の世話においての失敗を活かしてよりよい条件下の元で世話をすることが可能である。このような親の下の子への世話を見て、長子は自分が生まれてきてずっと両親の関心や愛情を独り占めしていたはずなのに、下の子の誕生によって今までその特権的な地位が下の子に奪われてしまった、簡潔に言えば、今まで自分の受けてきた両親の愛情や関心のすべてが下の子にいつてしまったと思ひ込み、その結果、劣等感を抱きやすいと指摘されている。それでは、下の子、すなわち中間子や末っ子はどうだろう。彼らもまた、別の視点から上の子に対して劣等感を抱きやすいと考えられる。これは、下の子から見て、親にとってはじめての子どもである上の子は、自分よりも優遇されているからだと考えられる。また、親は長子の世話をしたという経験によって、ある程度子育ての要領をわかっているため、場合によっては下の子を放置することもあり、それによって下の子は上の子に対して、自分は上の子よりも優遇されていないのではないかと劣等感を抱くことも少なくないと考えられる。さらに、異なる視点から見ると、下

の子は上の子を見ながら育つとされており、上の子が失敗した場面や、苦勞した場面を避けて通るなどの行動をとる。いわば、上の子から学んでいるわけだが、その結果、同じ親に育てられても上の子とは違う性格や考え方になる場合が多い。

第2に、家庭における子どもの地位と文化である。近藤(2010)は、「家庭における子どもの地位や親の役割期待が異なることが、人格や行動の差異をもたらし、社会性の発達に影響を与えている」と指摘している。これは、現代日本における、年少者は年長者を敬い、従わなければならないといった長幼の序や、人間関係において上下の区別がなされるといった風潮が、きょうだい間にも反映されており、親がきょうだいの中でも、兄や姉に対して様々な取り組みや能力において期待をする傾向があるとされている。「古くから言われている『総領の甚六』『次男のさかん坊』『末っ子の甘えん坊』などの言葉は、出生順位との間に関係があることを意味する」(近藤, 2010)。したがって、長子が「弟(妹)に負けて恥ずかしくないの?」「お兄(姉)ちゃんなんだから」といった親からの叱咤を受けていたという話をよく聞くことになる。こういった現代日本の親の子どもへの役割期待の背景には、家父長的家制度という独特の日本文化が、戦前まで続いたことにある。つまり長男が、次男、三男よりも重要視され、民法上では他の兄弟と平等となった今日においても、この制度の名残があるとされている。

このように、出生順位や家庭内での位置づけが直接的に人格や行動の差異に関係しているのではなく、それに伴う親の育児態度や経験、子どもへの役割期待の違いなどが大きく関係してくるのである。

出生順位別の性格特徴 今回の研究で対象にする出生順位は長子、中間子、末っ子、一人っ子の4つのカテゴリーである。出生順位ごとの性格特徴は、白差(2004)、近藤(2010)に従って、以下のようにまとめられる。

まず長子は、きょうだいの中で一番初めに生まれた兄、姉であると定義できる。ここで忘れられがちなのが、長子には確実に一人っ子の期間があることである。その期間中は、家中の王座に君臨し、「小さな王様」として家庭の中で中心的な存在とし

て大切にされる。したがって、おおらかで、おっとりとした人格を形成する傾向がある。成長過程の中で、下の子が生まれると、親を独占できないことに気付く。欲しいものがあつたとしても遠慮をしようというような、自分の感情を押し殺しがちになる。したがって、控え目・素直・慎重など、落ち着きがあり、自制心のある人格を形成する。また、下の子の面倒を見なくてはならない状況もあるため、「自分が何とかしなければいけない」というような責任感が培われ、真面目な性格を形成するとも考えられる。他にも、面倒なことを嫌うなどの自分本位な面もあるが、「下にきょうだいがいるため、上から強制的に押し付ける形がとられるのではないか」(濱, 2003)と考えられる(末尾の付表1を参照)。

中間子は、上と下にきょうだいを持つ子と定義できる。生まれた時に、年上のきょうだいが存在している点では末っ子と共通しており、何年か経つと年下のきょうだいの出現を経験するという点では長子と共通している。上下のきょうだいに挟まれて育つために、どんなタイプとも上手に付き合える社交性を、幼い頃から身につけることができる。上には下の子として甘え、下には上の子として甘えさせる適応力の高さや器用さは、中間子の大きな特徴とも言える。しかし、その反面、中間子は僻(ひが)んだりなどの性格を形成しやすい傾向にあり、問題行動を起こしやすいとされている。これには2つの理由が考えられる。第1の理由として、中間子のポジションそのものが注目されにくかったり、両親の愛情が十分に与えられない傾向にあるためである。これは、上の子ポジションは長子、下の子ポジションは末っ子ですでに満たされているので、家族から無視をされる傾向があるとされる。したがって、親からの愛情の不安・不満に常につきまといわれているからであると考えられる。第2の理由として、上下のきょうだいからの圧力に対抗しなければならないためである。例えば、長子のお古である服やおもちゃを与えられるために新品の物を自分には与えられなかったり、末っ子に自分の物を横取りされたとしても我慢をさせられるといったものである。これらの経験によって欲求不満が強まり、そのはけ口や自己表現として、非行などの問題行動を起こし

やすいと考えられる。浜崎・依田（1985）は、中間子の生育環境について、「長子や末子のそれのように共通な部分が少ない。中間子それぞれは、あまり共通性のない独特な環境で育っている」と述べていることから、中間子は複雑な生育環境の中で育つと考えられる（付表2を参照）。

末っ子は、きょうだいの中で最後に生まれてきた子であると定義できる。生まれた時に年上のきょうだいが存在している点では中間子と共通しており、年下のきょうだいを持つ経験がないという点では一人っ子と共通している。兄や姉と比べると、創造的で安心感があり、自信があることも多いと言われる。その要因としては、両親が子育てに慣れて余裕がでてくるため、しつけが甘くなりがちになることが挙げられる。また、家族で一番の年少者ということで、親、兄、姉から何かと可愛がられ、愛情をたくさん注がれる傾向がある。そのため、意識の底に「自分は愛されて当然」という思いがあり、それが甘えや自己中心的な態度となって表れやすいと言われている。末っ子には甘えん坊が多いと一般的に信じられているのも、こういった傾向があるためであると考えられる。また、世話を焼かれて育つことから、面倒なことは人任せにする傾向があり、末っ子は他のきょうだいに比べると、一般に責任感や分別に乏しくなると言われている。そして、末っ子は年上に囲まれた環境にいて、「追いつきたい」気持ちが強くなり、負けず嫌いの性格が形成されることが多い（付表3を参照）。

一人っ子は、上下のきょうだいがいない子と定義できる。一人っ子研究は、Hall（1907）を始め、きょうだい研究において重要視されている。両親にとってはたった1人の子どもであるため、大きな期待を受ける一方、長子とは異なり、両親の注目を巡って争う必要もないため、マイペースな性格が形成されることが多い。当然ながら、家庭においてリードをとるのは成人である親だけであるため、きょうだいの子どももっぱさの影響を受けることなく、大人をお手本に早いうちから分別を身につける。しかし、その反面、一人っ子研究の起源を辿ると、Hall（1907）が「ひとりっ子であることは、それだけで1つの病気である」と過激な表現で一人っ子の定義を述べている他、高橋（2009）もまた「ひ

とりっ子については否定的な評価がされがちである」と述べている。成長過程の中で「ヨコ」の関係を築く時期が、きょうだいを持つ子よりも必然的に遅くなる。そのため、きょうだいを持つ子よりも一人っ子は競争や協力といった社会的スキルを身につけることが難しく、その影響により、争いごとが苦手であり、人との競い合いを避けることが多いと考えられる。また、親にとってたった1人の子どもであるがゆえに、養育をするにあたって過保護・溺愛・過干渉になることが多い。そのため、物事を自分で決めることが苦手であり、自己中心的で依頼心が強くなりやすい傾向がある（付表4を参照）。

攻撃性と親の養育態度の関連について 攻撃性とは、一般的に「他者に危害を加えようとする意図的行動」（大淵、1993）と定義されている。しかし、山崎（2008）によると、「攻撃性に関する研究は、臨床心理学をはじめ、他分野の心理学、人類学、生物学、動物行動などで行われており、研究分野によって攻撃性のとらえ方の幅が広く、このことは攻撃性について考える上で、多面的に考えることが出来る反面、攻撃性がどのようなものであるのかといったことについての考え方を混乱させる原因にもなっている」と述べている。心理臨床の領域では、「攻撃性は“能動的な力”と“破壊的な力”の二面性を持つ。前者は、外界への適応行動を発動させ、自尊心の基礎ともなる。後者は、無意識の次元から発せられた衝動・欲動が、内的対象関係の次元で処理されることによって自他に向づけられる破壊的な行動および情動・衝動であり、憎しみと愛情欲求といった両価的感情を伴う」（安立、2001）という考え方があり、攻撃性にはネガティブな面とポジティブな面が指摘されている。山崎（2008）は、「青年期の攻撃性についてはマスメディアの報道などを通して注目を浴び、見聞きすることが多くなっており、青少年の持つ攻撃性・攻撃行動への理解・対応がより重要になってきている」と述べている。それほど、彼らの攻撃性や攻撃行動への理解・対応が難しいとされている。

笹井・岡田（2009）は、親の養育態度が子どもの攻撃性に影響を及ぼすことを明らかにしており、「親から愛されることなく拒否的な態度で養育されてきた子どもは、成長してからも自分は誰からも

愛されていないと感じ自己否定的な感情を持つとともに、そのことに怒りを感じやすくなる、そして、その怒りを親に対してだけでなく、その他の他者及び自己に対しても向けやすくなる」と述べている。つまり、親の愛情を感じられずに育ってきた子どもは、そのはけ口として問題行動を起こしやすいとされている。実際、マスメディアの報道でも、子どもに虐待をした保護者が自身もまた親に虐待を受けていたと証言している事例がある。他にも、普段は大人しく真面目であった、所謂「よい子」である青年が、イライラしていたという理由で突然に家庭内暴力をふるったり、些細なことでまったく関係ない他者を巻き込んだりといった事柄が注目を浴びている。これについては、親からの絶大な期待を寄せられていたことや、親から他のきょうだいと比べられていたことで、プレッシャーがかかり、それが爆発した結果、家庭内暴力や非行に至ると考えられている。このようなことから、親の養育態度が子どもの攻撃性に影響を及ぼしていると考えられる。

目的と仮説

出生順位によって性格特徴が異なるのは、親の養育態度と彼らの生育環境の違いによるものであり、攻撃性は親の養育態度と関連をもつことが過去の様々な研究において指摘されている。そこで本研究では、出生順位の影響によって攻撃性に違いが生じるのかどうかについて調べることにする。なお、本研究では、攻撃の程度が高いという意味でも、多いという意味でも、全て「攻撃性が高い」と定義して、本研究を進めることにする。親の養育態度が各出生順位によって違うとすれば、出生順位によって親からの愛情の量・質が異なるため、その分満足度も異なる。このことから、出生順位による満足度の違いによって攻撃性の程度に違いが生まれると思われる。これを第一の仮説とする。

次に、中間子は、両親の愛情が十分に与えられない傾向にあり、上下のきょうだいの圧力に耐えなければならないので、最も攻撃性が高いと考えられる。また、長子は、親から最も役割期待を持たされ、成長過程で自分より後に現れた弟妹にその注目を奪われるショックを経験してきているた

めに自分の感情を押し殺しがちであり、2番目に攻撃性が高い。さらに末っ子は、何かと愛情をたくさん注がれる傾向があり、意識の底に「自分は愛されて当然」という自己中心的な考えから攻撃性が生まれる場合があると想定されるので、3番目に攻撃性が高いと考えられる。そして、最も攻撃性が低いのは一人っ子である。これらを第二の仮説とする。

さらに、同じ出生順位でも性別によって攻撃性に差が生じる。これを第三の仮説とする。

以上の仮説をまとめると次のようになる。

仮説1) 出生順位によって、攻撃性に違いが生じる。

仮説2) 攻撃性は、中間子、長子、末っ子、一人っ子の順に高い。

仮説3) 性別によって、同じ出生順位でも攻撃性に違いが生じる。

方 法

調査の方法 質問紙法を用いて、大学生を対象に意識調査を行った。フェイスシートでは、性別、何人きょうだいであるか、出生順位について問うた。出生順位については、「一番初めに生まれてきた者を長子、3人きょうだい以上の長子と末っ子以外の者を中間子、一番後に生まれてきた者を末っ子とする」という説明を加えた。

本研究で用いた質問紙は、大竹・島井・曾我・嶋田(1998)が作成した「中学生用攻撃性質問紙(HAQS)」で、質問は23項目あり、「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「よくあてはまる」(3点)、「とてもよくあてはまる」(4点)の4件法であった。この質問紙は中学生を対象にしたものであるが、大学生を対象にこの質問紙を用いた先行文献が数あるため、中学生以上を対象にした調査も実施可能であるとともに、因子的妥当性、信頼性の高い尺度であることが示されている。

研究対象 質問紙調査は、京都府内にあるK大学に在籍する、合計151名(男子91名、女子50名)の大学生を対象に行った。集計・分析をするにあたり、記入漏れがあった10名を除外したため、有効回答数は141名であった。その内訳を、表1に示した。

表1 アンケート回答者の内訳

性別	長子	中間子	末っ子	一人っ子	総計
男性	37	7	33	14	91
女性	14	8	20	8	50
総計	51	15	53	22	141

表2 女性の攻撃性尺度得点の分散分析

	平方和	df	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	841.020	3	280.340	4.548	.007
グループ内	2835.700	46	61.646		
合計	3676.720	49			

下線を引いた数値： $p<.01$

表3 女性の攻撃性尺度得点の多重比較

(I) 出生順位	(J) 出生順位	平均差 (I-J)	標準誤差	有意確率	99% 信頼区間	
					下限	上限
長子	中間子	-2.250	3.480	.916	-13.70	9.20
	末っ子	6.700	2.736	.082	-2.31	15.71
	一人っ子	-3.000	3.480	.824	-14.45	8.45
中間子	長子	2.250	3.480	.916	-9.20	13.70
	末っ子	8.950	3.285	.043	-1.86	19.76
	一人っ子	-7.500	3.926	.997	-13.67	12.17
末っ子	長子	-6.700	2.736	.082	-15.71	2.31
	中間子	-8.950	3.285	.043	-19.76	1.86
	一人っ子	-9.700	3.285	.025	-20.51	1.11
一人っ子	長子	3.000	3.480	.824	-8.45	14.45
	中間子	.750	3.926	.997	-12.17	13.67
	末っ子	9.700	3.285	.025	-1.11	20.51

下線を引いた数値： $p<.10$

調査時期・形式 2015年11月17日(火)から2015年11月30日(月)にかけて、授業内、また個別に依頼して質問紙を配布、実施した。また、質問紙には無記名で記入させた。

結果の処理 攻撃性尺度の回答は、4段階評定で求め、各項目への回答に対して1～4点を「まったくあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「よくあてはまる(3点)」、「とてもよくあてはまる(4点)」のように各項目に与えた。

逆転項目である項目8と項目11は、尺度を逆転させ、「まったくあてはまらない(4点)」、「あまりあてはまらない(3点)」、「よくあてはまる(2点)」、「とてもよくあてはまる(1点)」とした。

各出生順位別に攻撃性尺度得点を計算し、各出生順位別に平均を求め、出生順位間で比較した。また、同じ出生順位ごとに性差があるのかを分析した。

結 果

分散分析の結果 仮説1を検証するにあたって、攻撃性尺度得点において、出生順位間の平均を比較するために、独立変数を出生順位、従属変数を

攻撃性尺度得点とし、1要因4水準の対応のない分散分析を行った。その結果、出生順位間に有意な差が認められなかった($F(3,137)=1.951, ns$)。また、性差によって差があるかどうかを調べるにあたって、男女別に出生順位間の平均を比較するために、1要因4水準の対応のない分散分析を行った。その結果、男性は出生順位間に有意な差が認められなかった($F(3,87)=2.126, ns$)。しかし、女性は出生順位間に有意な差が認められた($F(3,46)=4.548, p<.01$)。その結果を表2に示した。女性のきょうだい関係は攻撃性に影響を与える傾向があると考えられることから、女性の出生順位間で多重比較を行った。その結果、有意な差は認められなかった(長子と中間子, .916, 長子と一人っ子, .824, 中間子と一人っ子, .997)が、末っ子と長子, 末っ子と中間子, 末っ子と一人っ子の間に有意な傾向(末っ子と長子, .082, 末っ子と中間子, .043, 末っ子と一人っ子, .025)が見られた。その結果を表3に示した。末っ子とそれ以外の出生順位間において、攻撃性に違いがある傾向があると言える。よって、仮説1として挙げた「出生順位によって、攻撃性に違いが生じる」は一部支持された。

出生順位間における攻撃性の差 仮説2を検証するにあたって、全体、男女別に、各出生順位別に攻撃性尺度得点を合計し、平均を求めた。全体の

きょうだい関係と攻撃性の関連性について

平均得点として図1, 男女別の平均得点として図2を示した。

全体の攻撃性尺度得点を出生順位別に見ると、長子、中間子、一人っ子に間には有意な差は低かった（長子 57.8 点、中間子 58.8 点、一人っ子 55.7 点）。末っ子においては3つのカテゴリーと比較して有意な差が高かった（52.1 点）。また、男女別の攻撃性尺度得点を出生順位別に見ると、性差において有意な差がない中間子（男子 58.3 点、女子 58.3 点）以外の三つのカテゴリーには、有意な差があることがわかった（男子：長子 58.4 点、末っ子 53.8 点、一人っ子 53.8 点、女子：長子 56 点、末っ子 49.3 点、一人っ子 59 点）。全体においては、中間子、長子、一人っ子、末っ子の順に攻撃性が高かった。男子においては、長子と中間子、一人っ子と末っ子が、それぞれほとんど同じ得点であり、長子と中間子、一人っ子と末っ子の順に攻撃性が高かった。女子においては、一人っ子、中間子、長子、末っ子の順に攻撃性が高かった。よって、仮説2として挙げた「攻撃性は、中間子、長子、末っ子、一人っ子の順に高い」は支持されなかった。

男女差のt検定 仮説3を検証するにあたって、攻

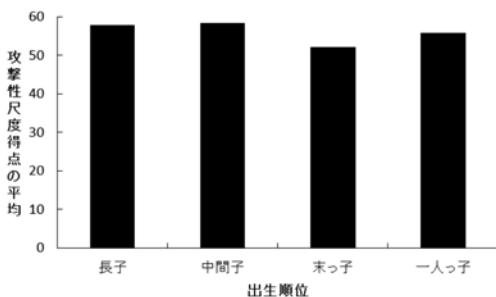


図1 全体における出生順位間の攻撃性の比較

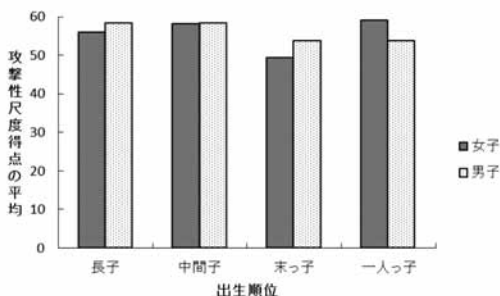


図2 男女別における出生順位間の攻撃性の比較

撃性尺度得点の男女差を比較するため、出生順位ごとに対応のないt検定を行った。その結果、末っ子のみ男女間の攻撃性尺度得点に有意な差が認められた ($t(51) = 2.206, p > .05$)。また、長子、中間子、一人っ子は有意な差が認められなかった（長子 $t(49) = 0.87, ns$, 中間子 $t(13) = 0.006, ns$, 一人っ子 $t(20) = -1.598, ns$ ）。よって、末っ子の攻撃性は性別によって違いが生じると考えられる。したがって、仮説3として挙げた、「性別によって同じ出生順位でも攻撃性に違いが生じる」は部分的に支持された。

考 察

きょうだい関係における影響 本研究において、きょうだいの出生順位は攻撃性に影響を及ぼすという仮説が部分的に認められ、末っ子とそれ以外の3つの出生順位間の攻撃性に違いが生じた。この結果から言えることは、末っ子は一番最後に生まれてきた存在であり、両親や周りの人から一番可愛がられる可能性のある存在である。上にきょうだいがいるとしても、満足のいくまで両親の目を独り占めでき、可愛がられることも多い。そのため、今まで両親を独り占めしていたはずが妹や弟の誕生によって独り占めできなくなった長子や、上のポジションと下のポジションのきょうだいに挟まれて両親を独り占めが出来ない中間子よりも、不安・不満を持つことが少ない。長子、中間子、末っ子に対する親の養育態度は異なり、その親の養育態度の違いによって子どもから感じとれる親からの愛情の満足度も異なると考えられる。一方、一人っ子と末っ子は、両親を独り占めできる機会が多いということでは共通しているが、一人っ子は両親にとってたった1人の子どもである。そのため、過保護に育てられたり、大きな期待を寄せられる。そういった両親からの圧力や自分1人でそれに対処しなければならないことなどが、末っ子との違いとして影響を与えているのかもしれない。

このように、末っ子は他のきょうだいに比べて攻撃性が低かったが、長子、中間子、一人っ子の出生順位間では攻撃性に有意な差が得られなかった。したがって、この3つの出生順位間においては攻撃性への影響の差はなかったことになる。

末っ子の相対的な攻撃性の高さについては上記

の要因以上に考察する術を持たないが、それ以外について出生順位が攻撃性に関して影響を与えなかった点について検討する。

影山(2000)は、「親が適当な役割を果たすことが、子どもの問題行動を防ぐ上で重要であり、親が十分に適切な役割を果たせていなくても、かつての日本においては、祖父母のきょうだいがその不十分な部分を埋める役割を果たしていた」と指摘している。そのように、出生順位が異なっても、周囲の役割分担による補いによって、きょうだいはバランスよく愛情を受けることができた部分もあるかもしれない。

しかし、現代の日本は、少子化、核家族化が進んでいる。厚生労働省の国民生活基礎調査(2014)によると、ここ40年ほどの間で、日本の核家族世帯数は約1.7倍になっている。家族の中で子どもの数が少ないほど、親からの愛情が全員の万遍なく行き届きやすくなると考えられる。また、法務省の平成27年版犯罪白書(2015)によると、少年による刑法犯の検挙人員は年々減っている。このように、昔から現在にかけての家族における子どもの生育環境の変化によって、子どもの攻撃性が弱まり、問題行動があまり起きにくくなっていったのではないかと考えられる。

出生順位によって攻撃性に影響が出なかった他の要因としては、出生順位以外のきょうだいや家族要因もあるだろうし、それに加えて、攻撃性は他のさまざまな要因によって影響を受けるものであろうと考えられる。岡崎・杉井(2004)の研究では、きょうだい間の関係がお互いに分離しておらず、積極的な交流が行われ、日本人特有の甘えと親密性を伴ったきょうだい関係が築かれていることを明らかにしている。また、青年期はモラトリアム、マージナルマン、パラサイト・シングルといった青年期特有の発達課題を抱えている。ライフコースにおいては不安定な時期であり、そういった意味においても、青年期においては、きょうだいの果たす役割機能やその意義は大きいと示唆されている。現在の日本社会においては、少子化、個人化、私事化が浸透している。本郷(1997)は、「きょうだい関係が相手の心に踏み込まず、お互いのテリトリーを侵さない表面的な付き合いに変化してきた」と述べている。松原・平松(2004)の研究では、

現代の子どもには「対立」や「専制」の関係よりも、「調和」を重んじる傾向が見られ、きょうだい喧嘩をする機会が少なくなっていることが示唆されている。このことから、きょうだい以外の人間関係においても、誰かとぶつかることを避ける傾向があり、きょうだいの立場の違いによって攻撃性の違いが出にくくなっていると考えられる。

性差について 本研究では、攻撃性において末っ子に性差が認められた。末っ子は、きょうだいの中では一番最後に生まれてきた存在であり、長子や中間子よりも長い期間、親の愛情を独占する事が出来る。その末っ子に性差が生じたことが、親の養育態度の影響は、親の愛情を長く注がれるほど大きくなると解釈できる。

しかし、長子、中間子、一人っ子の出生順位間では攻撃性に有意な差が得られなかった。したがって、この3つの出生順位間においては攻撃性への性差による影響はなかったことになる。

末っ子の性差による影響については上記の要因以上に考察する術を持たないが、それ以外について性差が攻撃性に関して影響を与えなかった点について検討する。

高橋(2009)の研究では、男子にとって妹の存在が、女子にとっては姉の存在が攻撃性の抑制に繋がっている可能性が示されている。そして、「男子は年少の異性きょうだいを保護する役割を担うことで攻撃性のコントロールを身につけ、女子は同性の年長きょうだいに追従する役割を担うことで、攻撃性のコントロールを身につけている」と述べている(高橋, 2009)。このことから、自身の出生順位はもちろん、性別・きょうだいが異性か同性かなどといった環境要因によって、それぞれ担う役割が異なってくると考えられる。そして、その役割の影響で、同じ出生順位でも性別によって攻撃性の高さが変わってくるのではないかと推察する。

一般的に、女子よりも男子の方が、攻撃性が高いと言われ、多方面の研究領域においても、それが明らかになっている。西田(1984)は、攻撃性の性差について、男性が女性よりも攻撃的であることが、生物学的事実として認識されてきていると述べている。Eagly&Steffen(1986)のメタ分析では、男子は女子よりも身体面、心理的の両方において攻撃性が高いことが確認されている。

しかし、最近では、男子よりも女子の方が、攻撃性が高いという結果の研究が数多くある。Daniel (2008)によると、「男子よりも女子のほうが間接的攻撃性あるいは関係性攻撃性が多い」と述べている。つまり、女子の攻撃行動の特徴は、攻撃対象に対して直接ではなく間接的に攻撃する傾向があり、その対象を設定するにあたって、主に人間関係を重視するという。笹井・岡田(2009)は、女性の攻撃行動は、友人との絆や仲間グループの一員であるという感覚を阻害するという様式をとるのではないかと示唆している。金子(2000)は、女子は男子に比べて周囲との関係性が自己を規定する上で重要な役割を持ち、周囲との関係性を重視するために、対人関係において周囲に気を配る傾向が高いと述べている。Eagly&Steffen(1986)のメタ分析では、女子は攻撃行動によって他者に苦痛を与えることに対して、男子よりも強い不安と後悔の念を抱くことを明らかにしている。「怒りや攻撃交換は、女性にとってストレスのある経験で、満足のゆく対応もとりにくいのではないかと思います」(大淵, 1987)。女子は他者を攻撃することで、男子よりも心理的不安やストレスを多く抱く傾向がある。それを避けるために、他人を傷つけまいと気を配り、攻撃性や攻撃したくなる気持ちを抑圧する傾向があると考えられる。問題行動や非行を行うといった、他人を巻き込む行動をとることが少なくなっていることは、その人の人間関係が全体的に良好になるという意味ではよいことではある。しかし、それと同時に、人間関係で他人を傷つけることを恐れるあまり、社会的に適応するための攻撃性も少なくなっている可能性もあるように考えられる。

まとめと今後の課題 本研究では、きょうだいの出生順位が攻撃性の高さに与える影響について検討した。きょうだいに関する様々な先行研究において、出生順位ごとに異なった人格特徴をもち、その要因として親の養育態度やきょうだいの数、きょうだい環境が明らかになっている。本研究では、攻撃性に関して、末っ子において他との差が生じていることが明らかになったが、それ以外の出生順位間においては差が認められず、性差もまた末っ子のみ認められただけであった。このことの背景には家族状況の変化があろうし、また攻

撃性を作り出す要因が、家族要因に限らず多様であることが示されていると思われる。

本研究において、攻撃性に関して出生順位による差がほとんど見られなかった別の要因として、調査手続上の問題も考えられる。一般的な社会における攻撃性と、本研究の調査における攻撃性は異なるため、データの偏りがあることが考えられる。また、大学生のみを対象に調査を行ったため、限定的な研究にならざるを得なかった。その結果、各出生順位のデータ数と、男女別のデータ数が疎かであり、均等にならなかった。今後の研究・調査では、大学生のみ限定せず、様々な階層や、職業に就いている人が人口比に添った形でデータを取れるように配慮することと、データ数が出生順位ごと、男女ごとに均等になるように配慮する必要がある。

今回は、攻撃性ときょうだいの出生順位との関係に焦点をあてたが、今後はきょうだい関係や友人関係などのその他の人間関係、また人間関係以外の要因も含めて検討する必要があると思われる。

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導頂きました京都学園大学人文学部心理学科川畑隆教授、行廣隆次准教授、ならびに、調査にご協力いただいた先生方、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 岡崎有理子・杉井順子 2004 青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響—最も身近に感じるきょうだいとのダイアドな関係性を分析単位として— 奈良教育大学紀要 53.1 pp.231-238
- 伊田明 1990 きょうだい関係の研究 大日本図書
- 長濱裕佳・村田由紀子・守谷真美 2011 きょうだい構成と青年期の問題行動 平成23年度東北大学教育学部・教育学実習「統計的調査実習」報告書 pp.104-118
- 早川孝子・依田明 1983 ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係 横浜国立大学教育紀

- 要 (1962-1997) 23 pp.81-91
- 高橋江梨子 2009 児童の対人認知と社会的スキルに関する研究—きょうだいのある子とひとりっ子の比較を中心に— 創価大学大学院紀要 31 pp.215-240
- 近藤綾香 2010 きょうだい関係が孤独感や自尊感情に及ぼす影響について 人間文化学部学生論文集 8 pp.66-79
- 白差俊憲 2004 きょうだい関係とその関連領域の文献集成 II . 論述紹介編 (有) 川島書店
- 濱理恵 2003 出生順位と性格—きょうだい関係は性格形成に影響を与えるのか— p1-53
- Hall, G.S 1907 Aspects of child life and education. Boston Ginn & company
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心：攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 山崎俊輔 2008 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究 9 pp.143-151
- 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京大学大学院教育学研究科紀要 47 pp.475-487
- 笹井達夫・岡田涼子 2009 親の養育態度と青年の攻撃性との関係 徳島文理大学研究紀要 78 pp.95-108
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介他 1998 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 日本心理学会第 62 回大会論文集 pp.931-932
- 影山任佐 2000 のびた症候群 超のびた症候群 河出書房新社 pp.17-53
- 厚生労働省 2014 平成 26 年度国民生活基礎調査の概要 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/>
- 法務省 2015 平成 27 年版犯罪白書～性犯罪の実態と再犯防止～第 3 編 第 1 章 第 1 節 1 http://haksyol.moj.go.jp/jp/62/nfm/n62_2_3_1_1_1.html
- 本郷一夫 1997 ひとりっ子の友達関係—きょうだいの存在と親の養育態度はどのように影響するか— 児童心理 51 (5) pp.537-541
- 松原ゆう・平松清志 2004 子どもの現代的性格特性—きょうだい関係と親の養育態度の観点から— CCI 年報 17 pp.58-63
- Daniel, F. C. 小野善郎 (訳) 2008 子どもと青年の攻撃性と反社会的行動—その発達理論と臨床介入のすべて— 明石書店 (Daniel, F. C. 2002 Aggression and Antisocial Behavior in Children and Adolescent—Research and Treatment— The Guilford Press)
- 西田博文 1984 社会・文化的理解 中尾弘之 (編) 攻撃性の精神医学 医学書院 pp.146-157
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究 48 pp.473-480
- Eagly, A.H., Steffen, V.J 1986 Gender and Aggressive Behavior. A Meta-Analytic Review of the social Psychological Literature Psychological Bulletin 100 (3) pp.309-330
- 大淵憲一 1987 成人の怒りの経験における男女差 大阪教育大学紀要 第 I V 部門 36, 1 pp.25-32

付 表

以下の付表は、白差俊憲 (2004) 「きょうだい関係とその関連領域の文献修整 II . 論述紹介編」 p24 の出生順位別にみた人格・行動の特徴・傾向から引用したものである。

付表 1 長子 (第一子) の人格・行動の特徴や傾向の語句

指導的・責任感が強い・几帳面・仕事が丁寧・言語能力に優れる・学業成績がよい・素直・控えめ・慎重・自制的・保守的・親切・おおらか・おっとりしている・大人びている・ませている・信頼心が強い・気が弱い・要領が悪い・ストレスに弱い・面倒なことを嫌う・甘ったれ・根性がない・やきもちやき・わがまま・神経質・内向性・嫉妬心・優越感・支配性・臆病・苦労性

付表 2 中間子の人格・行動の特徴や傾向の語句

活発・適応能力、実行力がある・社会性、社交性がある・自己主張が強い・ひがみを持ちやすい・ひねくれやすい・気性が激しい・負けん気が強い・欲求不満が強い・反抗的な態度が出やすい・乱暴な行動に走りやすい・問題行動を起こしやすい・引っ込み思案・感情表現に乏しい

きょうだい関係と攻撃性の関連性について

付表3 末っ子の人格・行動の特徴や傾向の語句

明るい・快活・社交的・活動的・支配性、優越感を示す・甘ったれ・自己中心的・依存的・独立的、自立心に欠ける・引っ込み思案・内向的・神経質・内弁慶・わがまま・怠惰・泣き虫・意気地なし・ませている・忍耐力がない・利己的・友達が少ない

付表4 一人っ子の人格・行動の特徴や傾向の語句

明るい・素直・知的能力が優れている・礼儀が正しい・おおらか・のんびりしている・意地悪でない・神経がこまやか・自己中心的・利己的・社会性、社交性、協調性がない・体が弱い・甘ったれ・依存心、信頼心が強い・自立心に欠ける・忍耐力がない・意志が弱い・わがまま・気位が高い・おませ・嫉妬心が強い・神経質・情緒不安定